

夏目漱石

日漢  
對照  
有聲  
版

心

こころ

杜勤 譯

## 目 録

上	先生と私	002	先生與我	003
中	両親と私	160	父母與我	161
下	先生と遺書	240	先生和遺書	241

いち  
一

私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚る遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。

私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」といいたくなる。筆を執っても心持は同じ事である。よそよそしい頭文字などはとても使う気にならない。

私が先生と知り合いになったのは鎌倉である。その時私はまだ若々しい書生であった。暑中休暇を利用して海水浴に行った友達からぜひ来いという端書を受け取ったので、私は多少の金を工面して、出掛ける事にした。私は金の工面に二、三日を費やした。ところが私が鎌倉に着いて三日と経たないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国元から帰れという電報を受け取った。電報には母が病気だからと断ってあったけれども友達はそれを信じなかった。友達はかねてから国元にいる親たちに勧めない結婚を強いられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心の当人が気に入らなかった。それで夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を私に見せてどうしようと相談をした。私にはどうしてい

一

我一直稱他為先生，所以這裡也隱去真名實姓，只稱他為先生。這並非出自對世人的忌憚，而是因為對我來說，這個稱呼才最自然。每當關於他的回憶被喚醒時，我就不由得想叫一聲「先生」，伏案捉筆時也是同樣的心情。如果使用洋文的首字母稱呼他，我就感覺生分。

我與先生邂逅是在鎌倉，當時我還是一介青澀的書生。一個朋友利用暑假去海邊遊玩，寄來一張明信片，叫我務必去消遣一下。我決定籌措一筆盤纏就動身。籌措這筆盤纏花費了兩三天時間。不料我到鎌倉還不到三天，叫我來的那個朋友突然接到老家發來的電報，催他速回。電文上稱母親患病，可是他卻不相信。老家的父母很早以前就安排了一門他並不情願的親事，逼他接受。從現在的習慣來說，他結婚為時尚早，最關鍵的是他本人沒有相中對方。他這才故意跑到東京附近遊玩，迴避回老家。他把電報給我看，問我怎麼辦才好，可我也不知如何是好。不過如果他母親真的病了，他理所當然要回去。於是他最終還是回去了。我特地趕過來，卻成了孑然一身。

わか じっさいかれ はは びょうき  
いか分らなかつた。けれども實際彼の母が病氣であるとすれば  
かれ もと かせ  
彼は固より帰るべきはずであつた。それで彼はとうとう帰る事  
になつた。せつかく来た 私 は一人取り残された。

学校の授業が始まるにはまだ大分日数があるので鎌倉に  
おつてもよし、帰つてもよいという境遇にいた 私は、当分  
もと やど と かくご ともだち ちゆうごく しさんか むすこ  
元の宿に留まる覚悟をした。友達は中国のある資産家の息子  
で金に不自由のない男であつたけれども、学校が学校なのと  
かね ふ じゆう おとこ  
年が年なので、生活の程度は私とそう変りもしなかつた。し  
たとし とし せいかつ ていど わたくし かわ  
たがって一人ぼっちになつた 私は別に恰好な宿を探す面倒も  
もたなかつたのである。

やど かまくら へん び ほうがく たまつ  
宿は鎌倉でも辺鄙な方角にあつた。玉突きだのアイスクリー  
ムだのというハイカラなものには長い暇を一つ越さなければ  
て とど くるま い にじゅうせん と  
手が届かなかつた。車で行つても二十銭は取られた。けれど  
も個人別荘はそこここにいづつでも建てられていた。それに  
こじん べつそう た  
海へはごく近いので海水浴をやるには至極便利な地位を占めて  
いた。

わたくし まいにちうみ で か ふる くす かせ わらぶき  
私は毎日海へはいりに出掛けた。古い燻ぶり返つた藁葺の  
あいだ とお ぬ いそ お へん と かいじんしゆ  
間を通り抜けて磯へ下りると、この辺にこれほどの都会人種  
す おも ひしよ き おとこ おんな すな うえ うご  
が住んでいるかと思うほど、避暑に來た男や女で砂の上が動  
いていた。ある時は海の中が銭湯のように黒い頭でごちゃご  
ちやしている事もあつた。その中に知つた人を一人ももたない  
わたくし にぎ けしき なか つつ すな うえ ぬ  
私も、こういう賑やかな景色の中に裹まれて、砂の上に寝そ  
べつてみたり、膝頭を波に打たしてそこいらを跳ね廻るのは  
ゆかい ちがひ ぎがしら なみ う は まわ  
愉快であつた。

わたくし じつ せんせい ざつとう あいだ みつ だ  
私は実先生をこの雑沓の間に見付け出したのである。  
ときかいがん かけぢや や にけん わたくし はずみ  
その時海岸には掛茶屋が二軒あつた。私はふとした機会か  
らその一軒の方に行き慣れていた。長谷辺に大きな別荘を構え  
いつけん ほう い な は せ へん おお べつそう かま  
ている人と違って、各自に専有の着換場を拵えていないこ

離開學還有很長時間，當時的處境下，我既可以繼續留在  
鎌倉，也可以回去，不過還是決定住在原來的旅館裡。那位朋  
友是中國<sup>①</sup>地區的一個富家子弟，家境比較闊綽。可是他畢竟  
在學校讀書，又年紀輕輕，不能隨便花錢，生活境況與我也不  
相上下。因此即便我孤身一人，也不必大費周章另找個更合適  
的旅館。

旅館位於鎌倉的偏僻之處。要趕時髦打個台球或吃個冰淇淋  
都得走很長一段田埂，乘車去要花兩角錢。不過這裡零零星  
星地蓋有好幾棟私家別墅，離海又近。洗海水浴這裡倒是一個  
得天獨厚的地方。

我每天下海游泳。穿過一片陳舊的房子，這些房子的稻草  
屋頂被風雨日曬侵蝕得黑乎乎的。我來到海濱，看見許多前來  
避暑的男男女女成群結隊在沙灘上湧動。我直納悶：這附近怎  
麼住着這麼多城裡人？有時大海猶如一個大浴池，上面蠕動着  
一群黑壓壓的腦袋。其中我沒有一個熟人，只是夾雜在熙熙攘  
攘的人群中，或慵懶地躺在沙灘上，或任憑陣陣浪花拍打着膝  
蓋四處飛濺，優哉游哉。

我正是在這片嘈雜中發現先生的。那時海灘邊有兩家茶  
棚，一個偶然的機會促使我習慣了去其中的一家。在長谷那邊

① 指日本的中部地區，位於本州島西部。

いらの避暑客には、ぜひともこうした共同着換所といった風なものが必要なのであった。彼らはここで茶を飲み、ここで休息する外に、ここで海水着を洗濯させたり、ここで鹹はゆい身体を清めたり、ここへ帽子や傘を預けたりするのである。海水着を持たない私にも持物を盗まれる恐れはあったので、私は海へはいるたびにその茶屋へ一切を脱ぎ棄てる事にしてきた。

## 二

私 がその掛茶屋で先生を見た時は、先生がちょうど着物を脱いでこれから海へ入ろうとするところであった。私 はそのとき反対に濡れた身体を風に吹かして水から上がって来た。二人の間には目を遮る幾多の黒い頭が動いていた。特別の事情のない限り、私 はついに先生を見逃したかも知れなかった。それほど浜辺が混雑し、それほど私の頭が放漫であったにもかかわらず、私 がすぐ先生を見付け出したのは、先生が一人の西洋人を伴っていたからである。

その西洋人の優れて白い皮膚の色が、掛茶屋へ入るや否や、すぐ私の注意を惹いた。純粹の日本の浴衣を着ていた彼は、それを床几の上にすぼりと放り出したまま、腕組みをして海の方を向いて立っていた。彼は我々の穿く猿股一つの外何物も肌に着けていなかった。私にはそれが第一不思議だった。私 はその二日前に由井が浜まで行って、砂の上にしゃがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めていた。私の尻をおろした所は少し小高い丘の上で、そのすぐ傍がホテルの裏口になっていたので、私の凝としている間に、大分多くの男が塩を浴びに出て来たが、いずれも胴と腕と股は出

擁有大別墅の人除外、一般的避暑遊客沒有各自專用的更衣室，無論如何都需要一個公共更衣室。他們在這裡喝茶休息，除此之外還在這裡洗洗泳衣，沖洗鹹津津的身體，或寄存帽子、傘之類的物品。我沒有泳褲，也怕東西被人偷走，所以每次下水前都去這家茶棚把衣服脫得只剩一條褲衩。

## 二

我在茶棚遇到先生時，他剛脫完衣服正要下水。我恰好相反，任憑海風吹拂着濕漉漉的身體走上岸來。兩人之間隔着無數個湧動的黑腦袋，遮住了視線。正常情況下，也許我就會與先生擦肩而過了。海灘如此嘈雜，我又是如此漫不經心，可我卻馬上留意到先生，這是因為先生陪着一個洋人。

那個洋人皮膚白得出奇，一進茶棚就吸引了我的目光。他穿着一件地道的日本式浴衣<sup>①</sup>，脫下來往長凳上一甩，又着胳膊面朝大海兀立着。除了我們穿的那種褲衩，身上幾乎一絲不掛。這一點首先讓我頗感詫異。兩天前我就來到由井浜，蹲在沙灘上久久地眺望着洋人下水的情景。我坐在略高的沙丘上，旁邊就是一家賓館的後門。我觀望的時候，見到許多男人出來沖洗身上的鹹水，但卻沒有人裸露出胴體、胳膊和大腿。女人們往往更是把身體遮得嚴嚴實實。人們大都頭戴着橡膠泳帽，絳紫

① 和服的棉單衣・夏季或入浴後穿用。

していなかった。女は殊更肉を隠しがちであった。大抵は頭に護謨製の頭巾を被って、海老茶や紺や藍の色を波間に浮かしていた。そういう有様を目撃したばかりの私の眼には、猿猴一つで済まして皆なの前に立っているこの西洋人がいかにも珍しく見えた。

彼はやがて自分の傍を顧みて、そこにごんでいる日本人に、一言二言何かいった。その日本人は砂の上に落ちた手拭を拾い上げているところであったが、それを取り上げるや否や、すぐ頭を包んで、海の方へ歩き出した。その人がすなわち先生であった。

私は単に好奇心のために、並んで浜辺を下りて行く二人の後姿を見守っていた。すると彼らは真直に波の中に足を踏み込んだ。そして遠浅の磯近くにわいわい騒いでいる多人数の間を通り抜けて、比較的広々とした所へ来ると、二人とも泳ぎ出した。彼らの頭が小さく見えるまで沖の方へ向いて行った。それから引き返してまた一直線に浜辺まで戻って来た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体を拭いて着物を着て、さっさとどこへか行ってしまった。

彼らの出て行った後、私はやはり元の床几に腰をおろして烟草を吹かしていた。その時私はぼかんとしながら先生の事を考えた。どうもどこかで見た事のある顔のように思われてならなかった。しかしどうしてもいつどこで会った人が想い出せずにしまった。

その時の私は屈托がないというよりむしろ無聊に苦しんでいた。それで翌日もまた先生に会った時刻を見計らって、わざわざ掛茶屋まで出かけてみた。すると西洋人は来ないで先生ひとり麦藁帽を被ってやって来た。先生は眼鏡をとって台の上に置いて、すぐ手拭で頭を包んで、すたすた涙を下りて行っ

色、藏青色、天藍色……五颜六色の頭巾漂浮在波浪間。這樣的情景我已經習以為常了，因此眾目睽睽中竟然站着一個只穿條褲衩的洋人，在我看來實在太稀罕了。

過了片刻，他朝自己身邊瞥了一眼，對那裡彎着腰的一個日本人說了一兩句話。那個日本人正在拾起落在沙灘上的毛巾。拾起毛巾後馬上包在頭上，朝着大海的方向走去。那個人就是先生。

我純粹是出於好奇心，目送着他倆並肩走下沙灘。只見他倆徑直前行，踏着浪花，穿過在礁石邊的淺灘戲水的熙熙攘攘的人群，走到較寬敞的水域後，就游了起來，兩個腦袋越來越小。不久他們又折返回來，筆直地游到岸邊。回到茶棚後，也不用井水沖洗，而是直接把身體擦乾，穿上衣物，匆匆離去。

他倆離開後，我仍然坐在原來的長凳上一邊抽着煙，一邊愣愣地揣摩着先生這個人。我總覺得似曾相識，卻想不起來在何時何地見過他了。

當時的我與其說是無憂無慮，不如說是百無聊賴。因此第二天，我盤算好昨天見到先生的時間特地去了茶棚。這天是先生一個人來的，戴着一頂草帽，不見洋人的身影。先生摘下眼鏡，放在台子上。隨即用毛巾裹好頭，疾步走下海灘。他和昨天一樣，穿過嘈雜的戲水人群，獨自一人游了起來。我突然心

た。先生が昨日のように騒がしい浴客の中を通り抜けて、一人で泳ぎ出した時、私は急にその後が追い掛けたくなった。私は浅い水を頭の上まで跳かして相当の深さの所まで来て、そこから先生を目標に抜手を切った。すると先生は昨日と違って、一種の弧線を描いて、妙な方向から岸の方へ帰り始めた。それで私の目的はついに達せられなかった。私が陸へ上がって傘の垂れる手を振りながら掛茶屋に入ると、先生はもうちゃんと着物を着て入れ違いに外へ出て行った。

さん  
三

私は次の日も同じ時刻に浜へ行って先生の顔を見た。その次の日にもまた同じ事を繰り返した。けれども物をいい掛ける機会も、挨拶をする場合も、二人の間には起らなかった。その上先生の態度はむしろ非社交的であった。一定の時刻に超然として来て、また超然と帰って行った。周囲がいくら賑やかでも、それにはほとんど注意を払う様子が見えなかった。最初いっしょに来た西洋人はその後まるで姿を見せなかった。先生はいつでも一人であった。

或時先生が例の通りさっさと海から上がって来て、いつもの場所に脱ぎ棄てた浴衣を着ようとすると、どうした訳か、その浴衣に砂がいっぱい着いていた。先生はそれを落とすために、後ろ向きになって、浴衣を二、三度振った。すると着物の下に置いてあった眼鏡が板の隙間から下へ落ちた。先生は白緋の上へ兵児帯を締めてから、眼鏡の失くなったのに気が付いたと見えて、急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰掛の下へ首と手を突っ込んで眼鏡を拾い出した。先生は有難うと言って、それを私の手から受け取った。

生一念、尾隨他而去。於是我從淺灘處揮臂游起來，水花濺到我的頭頂，一點點游入深水。這時我瞄準先生用拔手泳<sup>①</sup>游了過去，不料先生一改昨天的游法，划着一道弧線從意想不到的方向游回岸邊。因此我沒能追上他。我上了岸，甩着滴水的手走進茶棚，這時先生已經換好衣服往外走，與我擦肩而過。

## 三

第三天我還在同樣的時間去海邊，又遇到了先生。第四天也是如此。可是兩人之間並沒有搭話的機會，也沒有寒暄的契機。並且先生的態度顯示出他不擅長交際。在固定的時間獨來獨往，卓爾不群，不管周遭何等喧鬧，他都看似淡定從容，不為所動。先生總是一個人，起初陪伴他的那位洋人以後再未露過面。

有一次，先生照例利索地走上岸來，拎起脫在老地方的浴衣正要穿上。不知何故，浴衣上卻沾滿了沙子。於是先生背過身去，抖了兩三下浴衣，想把沙子抖掉。不料放在衣服下面的眼鏡從板凳縫隙中掉落下來。先生穿上白底藍花浴衣，繫好腰帶，似乎這才發現眼鏡不見了，於是急急忙忙四周尋找起來。我迅速低頭，把手伸進板凳底下，拾起了眼鏡。先生說了聲「謝謝」，從我手上接過了眼鏡。

① 日本老式的游泳姿勢，手像自由泳，腳像蛙泳。

つぎ ひ わたくし せんせい あと うみ と こ  
次の日 私は先生の後につづいて海へ飛び込んだ。そうして  
せんせい ほうがく およ い に ちよう おき で  
先生といっしょの方角に泳いで行った。二丁ほど沖へ出ると、  
せんせい うし ふ かえ わたくし はな か ひろ おお うみ ひよう  
先生は後ろを振り返って私に話し掛けた。広い蒼い海の表面  
めん う きんじよ わたくし ふたり ほか  
面に浮いているものは、その近所に私ら二人より外になかった。  
つよ たいよう ひかり め とど かき みず やま て  
そうして強い太陽の光が、眼の届く限り水と山とを照ら  
していた。 わたくし じ ゆう かん き み きんにく うご うみ なか  
私は自由と歓喜に充ちた筋肉を動かして海の中で  
おど くる せんせい て あし うんどう や おお む  
躍り狂った。先生はまたはたりと手足の運動を已めて仰向けに  
なつたまま浪の上に寝た。私 もその真似をした。 青空の色が  
なみ うえ ね わたくし まね  
ざらざらと眼を射るように痛烈な色を私 の顔に投げ付けた。  
ゆ かい わたくし おお こえ だ  
「愉快ですね」と私は大きな声を出した。

しばらくして海の中で起き上がるように姿勢を改めた先生  
は、「もう帰りませんか」といって私を促した。比較的強い  
たいしつ わたくし うみ なか あそ なが うみ  
体質をもった私は、もっと海の中で遊んでいたかった。し  
かし せんせい さそ ととき わたくし かえ  
先生から誘われた時、私はすぐ「ええ帰りますよ」と  
こころよ こた ふたり もと みち はまべ ひ かえ  
快く答えた。そうして二人でまた元の路を浜辺へ引き返した。  
わたくし せんせい こん い せんせい  
私はこれから先生と懇意になった。しかし先生がどこに  
いるかはまだ知らなかった。

それから中二日おいてちょうど三日目の午後だったと思う。  
せんせい かけぢや や で あ ととき せんせい とつぜんわたくし む きみ  
先生と掛茶屋で出会った時、先生は突然私に向かって、「君  
はまだ大分長くここに居るつもりですか」と聞いた。 かんが  
考えのない私はこういう問いに答えるだけの用意を頭の中に蓄えて  
いかなかった。それで「どうだか分かりません」と答えた。しかし  
わら せんせい おお きみ ととき わたくし きゆう きま わる  
にやにや笑っている先生の顔を見た時、私は急に極りが悪  
くなった。「先生は？」と聞き返さずにはいられなかった。これ  
わたくし くち で せんせい こた せんせい  
が私の口を出した先生という言葉の始まりである。

わたくし ほんせんせい やど たず やど ふ つう りよかん  
私はその晩先生の宿を尋ねた。宿といっても普通の旅館  
ちが ひろ てら けいだい たてもの べつそう  
と違って、広い寺の境内にある別荘のような建物であった。そ  
す ひと せんせい かぞく こと わか わたくし せんせい  
こに住んでいる人の先生の家族でない事も解った。私 が先生

翌日、我緊隨先生撲入大海，然後跟他朝同一個方向游去。游出二百多米遠，先生回過頭和我搭話。蔚藍色的海面一望無際，四周只漂浮着我們兩人。極目遠望，炫目的陽光照耀着山山水水。我的肌體充滿自由和喜悅，揮動着臂膀在水中騰躍翻滾。先生突然仰面朝天，躺在波浪上小憩。我也學着先生的樣子躺在水面上。天空湛藍如洗，灼熱的陽光照得我睜不開眼睛。我喊道：「好舒服啊！」

過了一會兒，先生調整了姿勢，支起了身子。他催促道：「該回去了吧。」我體力比較好，本想在水中再多玩一會兒，可是先生開口了，我立即爽快地答應：「好的，回吧。」於是我倆就順着原路返回海灘上了。

從那以後，我就和先生親近了起來。不過當時我還不知道先生住在何處。

我記得時隔兩天，正好是到了第三天的下午，我又在茶棚遇到了先生。這時先生冷不丁問我：「你打算在這裡待很久嗎？」我沒有考慮過這個問題，一時語塞，隨口答道：「還不知道呢。」看到先生笑嘻嘻的表情，我突然覺得很尷尬，不由得反問道：「先生您呢？」這就是我用「先生」這個詞稱呼他的開始。

當天晚上，我去了先生下榻的旅館。說是旅館，其實卻是位於大寺院內的一幢別墅模樣的建築，與一般的旅店迥然不同。我還得知住在裡面的人並非先生的家眷。我張口閉口稱呼



先生と呼び掛けるので、先生は苦笑いをした。私はそれが年長者に対する私の口癖だといって弁解した。私はこの間の西洋人の事を聞いてみた。先生は彼の風変りのところや、もう鎌倉にいない事や、色々の話をした末、日本人にさえあまり交際をもたないのに、そういう外国人と近付になったのは不思議だといった。私は最後に先生に向かって、どこかで先生を見たように思うけれども、どうしても思い出せないといった。若い私はその時暗に相手も私と同じような感じを持ってはいはしまいかと疑った。そうして腹の中で先生の返事を予期してかかった。ところが先生はしばらく沈吟したあとで、「どうも君の顔には見覚えがありませんね。人違いじゃないですか」といったので私は変に一種の失望を感じた。

よん  
四

私は月の末に東京へ帰った。先生の避暑地を引き上げたのはそれよりずっと前であった。私は先生と別れる時に、「これから折々お宅へ伺っても宜ごさんですか」と聞いた。先生は単簡にただ「ええいらっしゃい」といっただけであった。その時分の私は先生とよほど懇意になったつもりでいたので、先生からもう少し濃かな言葉を予期して掛ったのである。それでこの物足りない返事が少し私の自信を傷めた。

私はこういう事でよく先生から失望させられた。先生はそれに気が付いているようでもあり、また全く気が付かないようでもあった。私はまた軽微な失望を繰り返しながら、それがために先生から離れて行く気にはなれなかった。むしろそれとは反対で、不安に揺かされるたびに、もっと前へ進みたくなった。もっと前へ進めば、私の予期するあるものが、いつ

他「先生」、先生露出苦笑的表情。我辯解說，這是我稱呼長輩的口頭禪。我打聽前幾天遇到的那位洋人時，先生打開話匣，說了許多他的事情，如性情古怪，已經離開鎌倉了，末了還說自己都覺得詫異，跟日本人都不太來往，卻和這個外國人交上朋友了。我最後對先生說好像在哪裡見過他，可就是想不起來了。年輕的我當時暗自揣測先生說不定也有同感，心中對先生的回答滿懷期待。可是先生沉吟片刻說：「我印象中沒有見過你，可能你記錯人了吧。」我感到一陣莫名的失望。

## 四

到了月底，我回到了東京，遠遠晚於先生離開避暑地的時間。與先生告別時，我問：「以後可以不時去府上拜訪您嗎？」先生只是淡淡地說了句：「行啊，來吧。」當時我滿以為已經和先生混得很熟了，所以內心期待著情意綿綿的話語。這麼輕描淡寫的回答，多少挫傷了我的自信心。

這樣的事情屢屢發生，讓我對先生感到失望。先生對此似乎有所察覺，似乎又渾然不知。雖然我反覆經歷了輕度的失望，卻不曾有過離先生而去的念頭。恰恰相反，每當在不安中內心產生動搖時，就更想靠近先生一步。我想如果再靠近一步，相信先生總有一天能接納我，讓我如願以償。我雖然是一個血氣方剛的年輕人，可不會對所有的人都率真地傾灑一腔熱血，為

か眼の前に満足に現われて来るだろうと思った。私は若かった。けれどもすべての人間に対して、若い血がこう素直に働こうとは思わなかった。私はなぜ先生に対してだけこんな心持が起るのか解らなかった。それが先生の亡くなった今日になって、始めて解って来た。先生は始めから私を嫌っていたのではなかったのである。先生が私に示した時々の素直ない挨拶や冷淡に見える動作は、私を遠ざけようとする不快の表現ではなかったのである。傷ましい先生は、自分に近づこうとする人間に、近づくほどの価値のないものだから止せという警告を与えたのである。他の懐かしみに応じない先生は、他を軽蔑する前に、まず自分を軽蔑していたものとみえる。

私は無論先生を訪ねるつもりで東京へ帰って来た。帰ってから授業の始まるまでにはまだ二週間の日数があるので、そのうちに一度行っておこうと思った。しかし帰って二日三日と経つうちに、鎌倉にいた時の気分が段々薄くなって来た。そうしてその上に彩られる大都會の空気が、記憶の復活に伴う強い刺戟と共に、濃く私の心を染め付けた。私は往來で学生の顔を見るたびに新しい学年に対する希望と緊張とを感じた。私はしばらく先生の事を忘れた。

授業が始まって、一カ月ばかりすると私の心に、また一種の弛みができてきた。私は何だか不足な顔をして往來を歩き始めた。物欲しうに自分の室の中を見廻した。私の頭には再び先生の顔が浮いて出た。私はまた先生に会いたくなくなった。

始めて先生の宅を訪ねた時、先生は留守であった。二度目に行ったのは次の日曜だと覚えていた。晴れた空が身に沁み込むように感ぜられる好い日和であった。その日も先生は留守であった。鎌倉にいた時、私は先生自身の口から、いつでも大抵宅にいるという事を聞いた。むしろ外出嫌いだということも

甚麼偏偏對先生才有這份心意，這一點連我自己都解釋不清。直到先生離開人世的今天，我才明白過來，先生從一開始就不討厭我。先生不時對我不冷不熱的寒暄以及貌似矜持的舉止，並非感到不快而有意疏遠我。先生的心靈有過創傷，他是以這種方式向試圖親近他的人發出警告：自己不是一個值得親近的人，就此打住吧。先生拒不接受別人的好意，似乎在藐視別人之前，早已藐視了自己。

我返回東京，自然打算去探望先生。回來後離開學足足有兩週時間，於是我想開學前去探望他。但是兩三天一過，探望先生的心情漸漸不如在鎌倉時那麼迫切了。加上大都會五光十色的氛圍喚醒了我的記憶，強烈地刺激着我的感官，同時也深深地感染了我的心。每當看到街上來來往往的學生的面孔，我就對新學年既充滿憧憬，又感到緊張。於是一時竟把先生忘在了腦後。

開學後約莫過了一個多月，我的心鬆弛下來了。我開始若有所失地在街上晃悠，或用飢渴的目光環視自己的房間。腦海裡再一次浮現先生的面龐，於是又決意去探望先生。

第一次登門造訪時，先生不在家。記得是在其後一週的星期天我第二次去了先生家。那天風和日麗，朗朗晴空彷彿要沁入肌體。不料先生又不在家。在鎌倉時，先生親口告訴過我，他不喜歡出門，無論甚麼時候他一般都在家的。可是我來了兩次都沒見到他的人影，想起他曾經說的那番話，心裡湧現一股

聞いた。二度来て二度とも会えなかった私は、その言葉を思い出して、理由もない不満をどこかに感じた。私はすぐ玄関先を去らなかつた。下女の顔を見て少し躊躇してそこに立っていた。この前名刺を取り次いだ記憶のある下女は、私を待たしておいてまた内へはいった。すると奥さんらしい人が代って出て来た。美しい奥さんであった。

私はその人から鄭寧に先生の出先を教えられた。先生は例月その日になると雑司ヶ谷の墓地にある或る仏へ花を手向けに行く習慣なのだそうである。「たった今出たばかりで、十分になるか、ならないかでございます」と奥さんは気の毒そうにいつてくれた。私は会釈して外へ出た。賑かな町の方へ一丁ほど歩くと、私も散歩がてら雑司ヶ谷へ行ってみる気になった。先生に会えるか会えないかという好奇心も動いた。それですぐ踵を回らした。

## 五

私は墓地の手前にある苗圃の左側からはいって、両方に楓を植え付けた広い道を奥の方へ進んで行った。するとその端れに見える茶店の中から先生らしい人がふいと出て来た。私はその人の眼鏡の縁が日に光るまで近く寄って行った。そうして出し抜けて「先生」と大きな声を掛けた。先生は突然立ち留まって私の顔を見た。

「どうして……、どうして……」

先生は同じ言葉を二遍繰り返した。その言葉は森閑とした昼の中に異様な調子をもって繰り返された。私は急に何とも応えられなくなった。

「私の後を跟けて来たのですか。どうして……」

莫名的怨氣。我沒有馬上離開大門口，望着女傭的臉，猶豫不決地站立在那裡。女傭記得我上次給過她名片，於是讓我等着，自己進屋去了。不久走出一位相貌端麗的夫人模樣的人。

夫人彬彬有禮地告訴我先生的去處。據夫人說，先生有個習慣，每個月的今天他都要去雜司谷墓地獻花憑弔一位逝者。夫人懷着歉意說：「他剛出門，大概十分鐘之前。」我領首致意後就離開了。我朝着鬧市方向走出一百多米，萌生一種好奇心：何不遛着彎去雜司谷碰碰運氣，說不定能見到先生呢。想到這裡，我便轉身往回走了。

## 五

墓地前方有塊苗圃，我從苗圃的左邊走進去，沿着兩邊種着楓樹的大道一直往裡走。這時，從道路盡頭處的一家茶館裡驀然閃現出一個人，模樣很像先生。我疾步追趕這個人，直到看到這個人的眼鏡框反射着陽光的距離，這才冷不丁地大喊一聲：「先生！」先生戛然止步，凝視着我。

「這是咋回事？咋回事？」

先生重複了兩遍同樣的問題，他的問話伴隨着一種異樣的聲調，迴蕩在萬籟俱靜的白晝中。我頓時語塞，不知如何回答。

「你一直跟着我嗎？這是咋回事？」

先生の態度はむしろ落ち付いていた。声はむしろ沈んでいった。けれどもその表情の中には判然いえないような一種の曇りがあった。

私は私 がどうしてここへ来たかを先生に話した。

「誰の墓へ参りに行ったか、妻がその人の名をいいましたか」

「いいえ、そんな事は何もおっしゃいません」

「そうですか。——そう、それはいいはずがありませんね、始めて会ったあなたに。いう必要がないんだから」

先生はようやく得心したらしい様子であった。しかし私にはその意味がまるで解らなかつた。

先生と私は通りへ出ようとして墓の間を抜けた。依撒伯拉何々の墓だの、神僕ロギンの墓だのという傍に、一切衆生悉有仏生と書いた塔婆などが建ててあった。全權公使何々というものもあった。私は安得烈と彫付けた小さい墓の前で、「これは何と読むんでしょう」と先生に聞いた。「アンドレとでも読ませるつもりでしょうね」といって先生は苦笑した。

先生はこれらの墓標が現わす人種々の様式に対して、私ほどに滑稽もアイロニーも認めてないらしかった。私が丸い墓石だの細長い御影の碑だのを指して、しきりにかれこれいたがるのを、始めのうちは黙って聞いていたが、しまいには「あなたは死という事実をまだ真面目に考えた事ありませんね」といった。私は黙った。先生もそれぎり何ともいわなくなった。

墓地の区切り目に、大きな銀杏が一本空を隠すように立っていた。その下へ来た時、先生は高い梢を見上げて、「もう少しすると、綺麗ですよ。この木がすっかり黄葉して、ここいらの地面は金色の落葉で埋まるようになります」といった。先生は月に一度ずつは必ずこの木の下を通るのであった。

向うの方で凸凹の地面をならして新墓地を作っている男

先生の態度反倒顯得從容不迫，聲音也很鎮定。可他的表情中卻流露出一絲難以言表的陰鬱。

我向先生解釋了來這裡的原委。

「我妻子說我給誰掃墓？說出他的名字了嗎？」

「沒有，這個甚麼都沒說。」

「是嗎？這倒也是。她和你初次見面，不會告訴你的，沒有這個必要嘛。」

先生這才顯出會心的樣子，可是我卻完全不懂其中的奧妙。

先生和我穿過墓地，朝着道路走去。在依撒伯拉某某之墓、神僕洛金之墓的旁邊豎立着一座塔形墓標，上面寫着「一切眾生悉有佛性」，有的還寫着「全權公使某某」的字樣。我在一座刻着「安德烈」三個漢字的小型墓碑前停下來，問先生：「這個名字怎麼念？」先生苦笑著回答：「大概念成 andore。」

先生對這些墓標各不相同的式樣並沒有像我一樣覺得滑稽可笑。我指着圓形墓石、細長的花崗岩墓碑，喋喋不休地說三道四。起初先生還默默地聽着，最後問我：「你還沒有認真考慮過死的問題吧。」我啞口無言。先生就此打住，不再多說了。

墓地邊緣巍然屹立着一棵遮天蔽日的大銀杏樹。走到銀杏樹下時，先生仰望着高高的樹梢說：「再過幾天就漂亮了，樹葉一片金黃，周圍的地面上鋪滿一層金色的落葉。」原來先生每個月都從這樹下走一次。

對面有一個男子正在平整凹凸不平的土地，修建新的墓地。

が、<sup>くわ て やす わたし み わたくし</sup> 鋏の手を休めて私たちを見ていた。私たちはそこから  
<sup>ひだり き かいどう で</sup> 左へ切れてすぐ街道へ出た。

これからどこへ行くという目的のない私<sup>わたくし</sup>は、ただ先生<sup>せんせい</sup>の歩  
<sup>ほう ある い せんせい くちかず き</sup> 方へ歩いて行った。先生はいつもより口数を利かなかった。  
それでも私<sup>わたくし</sup>はさほどの窮屈を感じなかったので、ぶらぶら  
いっしょに歩いて行った。

「すぐお宅へお帰りはですか」

「ええ別に寄る所<sup>ところ</sup>もありませんから」

二人はまた黙<sup>だま</sup>って南<sup>みなみ</sup>の方<sup>ほう</sup>へ坂<sup>さか</sup>を下<sup>くだ</sup>りた。

「先生<sup>せんせい</sup>のお宅<sup>たく</sup>の墓地<sup>ぼち</sup>はあそこにあるんですか」と私<sup>わたくし</sup>がまた  
<sup>くち き だ</sup> 口を利き出した。

「いいえ」

「どなたのお墓<sup>はか</sup>があるんですか。——ご親類<sup>しんるい</sup>のお墓<sup>はか</sup>ですか」

「いいえ」

先生<sup>せんせい</sup>はこれ以外<sup>いがい</sup>に何も答え<sup>こた</sup>えなかった。私<sup>わたくし</sup>もその話<sup>はなし</sup>はそれ  
<sup>き あ あり いちよう せんせい あと</sup> ぎりにして切り上げた。すると一町<sup>いち</sup>ほど歩いた後<sup>あと</sup>で、先生<sup>せんせい</sup>が  
<sup>ふ い もど き</sup> 不意<sup>ふい</sup>にそこへ戻<sup>もど</sup>って来た。

「あそこには私<sup>わたくし</sup>の友達<sup>ともだち</sup>の墓<sup>はか</sup>があるんです」

「お友達<sup>ともだち</sup>のお墓<sup>はか</sup>へ毎月<sup>まいげつ</sup>お参<sup>まい</sup>りをなさるんですか」

「そうです」

先生<sup>せんせい</sup>はその日<sup>ひ</sup>これ以外<sup>いがい</sup>を語<sup>かた</sup>らなかった。

## ろく

私<sup>わたくし</sup>はそれから時々先生<sup>ときときせんせい</sup>を訪問<sup>ほうもん</sup>するようになった。行<sup>い</sup>くた  
<sup>せんせい さいたく せんせい あ ど ずう かさ</sup> びに先生<sup>せんせい</sup>は在宅<sup>ざい</sup>であった。先生<sup>せんせい</sup>に会う度<sup>ど</sup>数が重<sup>かさ</sup>なるにつれて、  
<sup>わたくし しげ せんせい げんかん あし はこ</sup> 私<sup>わたくし</sup>はますます繁<sup>しげ</sup>く先生<sup>せんせい</sup>の玄関<sup>げんかん</sup>へ足<sup>あし</sup>を運<sup>はこ</sup>んだ。

けれども先生<sup>せんせい</sup>の私<sup>わたくし</sup>に対する態度<sup>たいど</sup>は初めて挨拶<sup>あいさつ</sup>をした時<sup>とき</sup>も、

他停下手中的鐵鋏，望着我們。我們從那裡往左一拐，走上了  
道路。

接下來我茫無目標，只是跟着先生的後面行走。先生比平  
時更加沉默寡言。可是我並不怎麼感到拘謹，繼續溜達着前行。

「您這就回家嗎？」

「嗯，沒有甚麼地方可去。」

兩個人又沉默了，往南一拐，走下了斜坡。

「先生家人的墓地在那裡嗎？」我又開口問道。

「不是。」

「那是誰的墓地？是您的親戚嗎？」

「不是。」

先生除此之外，不多說一句話。我也沒有刨根問底。走了  
約莫一百多米後，先生突然返回到我剛才的問題。

「我的一個朋友的墓地在那裡。」

「您每個月都給朋友掃墓嗎？」

「是的。」

除此之外，先生那天再也沒有說甚麼話了。

## 六

打那以後，我不時去探望先生，每次先生都在家。隨着與  
先生見面次數的增多，我越來越成為他家的常客了。

然而無論是最初的寒暄，還是親近了以後，先生對我的態

懇意こんいになったその後も、あまり変りかわはなかった。先生せんせいは何時もいつ静かしずかであった。ある時ときは静かしずか過ぎて淋さびしいくらいであった。私わたくしは最初さいしょから先生せんせいには近づちかぎたい不思議ふしぎがあるように思おもっていた。それでいて、どうしても近づちかかなければいられないという感じかんじが、どこかに強く働はたらいた。こういう感じかんじを先生せんせいに対してもってもっていたものは、多くおほくの人のうちであるいは私わたくしだけかも知れない。しかしその私わたくしだけにはこの直感ちよくかんが後のちになって事実じじつの上に証うえ拠立しよくてられたのだから、私わたくしは若々わかわかしいといわれても、馬鹿ばかげていると笑わらわれても、それを見越みこした自分じぶんの直覚ちよくかくをとにかく頼たのもしくまた嬉うれしく思おもっている。人間にんげんを愛あいし得うる人ひと、愛あいせずにはいられない人ひと、それでいて自分の懐じぶんに入はいろうとするものを、手てをひろげて抱だき締しめる事ことのできない人ひと、——これが先生せんせいであった。

今いまいった通り先生せんせいは始し終しゆう静しずかであった。落ち付おちついていた。けれども時ときとして変へんな曇くもりがその顔かおを横切よこぎる事ことがあった。窓まどに黒くろい鳥影ちやうえいが射さすように。射さすかと思おもうと、すぐ消きえるには消きえたが、私わたくしは始はじめてその曇くもりを先生せんせいの肩間みかんに認みとめたのは、雑司ぞうヶ谷がやの墓ぼ地ちで、不意ふいに先生せんせいを呼よび掛かけた時ときであった。私わたくしはその異様いようの瞬間しゆんかんに、今いままで快こころよく流ながれていた心臓しんぞうの潮流ちやうりゆうをちょっと鈍にぶらせた。しかしそれは単たんに一いち時じの結滞けつたいに過ぎすりなかつた。私わたくしの心こころは五分ごぶんと経たたないうちに平素へいその弾力だんりよくを回復かいふくした。私わたくしはそれぎり暗くらそうなこの雲くもの影かげを忘わすれてしまった。ゆくりなくまたそれを思おもい出ださせられたのは、小春こはるの尽つきるに間まのない或晩あるばんの事ことであった。

先生せんせいと話はなしていた私わたくしは、ふと先生せんせいがわざわざ注ちゆう意いしてくれた銀杏いちょうの大樹たいじゆを眼めの前まへに想おもい浮うかべた。勘定かんじようしてみると、先生せんせいが毎月まいげつ例れいとして墓参ぼさんに行く日ひが、それからちよみつど三日目かめに当あたっていた。その三日目みつかめは私わたくしの課業かぎようが午ひるで終おえる楽らくな日ひ

度たび並沒有多大的變化。先生せんせい總是那麼沉靜，有時讓人覺得有幾分淒涼。從一開始我就感到他性情乖戾，讓人難以接近。可是越是如此，就越抑制不住想接近他的衝動。在茫茫人海中，或許唯有我一個人對先生如此情有獨鍾。只有我覺得這種直覺後來事實上得到了印證。別人說我少不更事也好，笑我癡狂也好，我對自己這種先見之明的直覺感到欣慰和自豪。能夠愛別人，抑制不住愛別人，可是別人要投入自己懷抱，卻不能張開雙臂擁抱他。先生就是這樣一個人。

剛才說了，先生總是沉靜而從容不迫。可是臉上不時會掠過一絲奇異的陰霾，猶如一團黑色的鳥影劃過窗前，稍縱即逝。我最初看到先生眉宇間的陰霾，是在雜司谷墓地我冷不防對先生打招呼的時候。在那奇妙的剎那間，我的心臟彷彿突然間停止了供血。但這只不過是間歇性的罷了，沒過五分鐘，我的心臟又恢復了正常。這一絲陰霾也就像過眼煙雲，被我忘在腦後了。可是十月小陽春過後不久的一個晚上，我又偶然地想起這件事。

我在和先生聊天時，腦海裡突然浮現出先生特意指給我看的那棵大銀杏樹。我一估算，離先生每月固定去掃墓的日子還有三天。那天比較輕鬆，課上到中午就結束了。於是我就對先生說：

であった。私は先生に向かってこういった。

「先生、雑司ヶ谷の銀杏はもう散ってしまっただけですか？」

「まだ空坊主にはならないでしょう」

先生はそう答えながら私の顔を見守った。そうしてそこからしばし眼を離さなかった。私はすぐいった。

「今度お墓参りにいらっしゃる時にお伴をしても宜ごさんですか。私は先生といっしょにあそこいらが散歩してみたい」

「私は墓参りに行くんで、散歩に行くんじゃないですよ」

「しかしついでに散歩をなすったらちょうどいいじゃないありませんか」

先生は何とも答えなかった。しばらくしてから、「私ののは本当の墓参りだけなんだから」といって、どこまでも墓参りと散歩を切り離そうとする風に見えた。私と行きたくない口実だか何だか、私にはその時の先生が、いかにも子供らしくて愛に思われた。私はなおと先へ出る気になった。

「じゃお墓参りでも好いからいっしょに伴れて行って下さい。私もお墓参りをしますから」

実際私には墓参りと散歩との区別がほとんど無意味のように思われたのである。すると先生の眉がちょっと曇った。眼のうちにも異様の光が出た。それは迷惑とも嫌悪とも畏怖とも片付けられない微かな不安らしいものであった。私は忽ち雑司ヶ谷で「先生」と呼び掛けた時の記憶を強く思い起した。二つの表情は全く同じだったのである。

「私は」と先生がいった。「私はあなたに話す事のできない理由があって、他といっしょにあそこへ墓参りには行きたくないのです。自分の妻さえまだ伴れて行った事がないのです」

「先生、雑司ヶ谷の銀杏樹葉子已經掉光了吧。」

「還不至於光禿禿的吧。」

先生回答時一直注視着我，好一陣子視線沒有從我的臉上挪開。我馬上說：

「下次您去掃墓時，可以帶上我嗎？我想和先生一起去那裡散散步。」

「我是去掃墓，不是去散步的。」

「順便散散步，不也挺好嗎？」

先生沒有回答，過了一會兒說：「我真的只是去掃墓。」先生似乎執意要把掃墓和散步截然區分開來。不知道這是不是拒絕我的藉口，當時先生簡直像個小孩兒，讓人直納悶。於是我就更想去了。

「那麼就去掃墓，請先生帶上我。我也去掃墓。」

實際上我覺得區分掃墓和散步是毫無意義的。那時先生的臉色陰沉了下來，眼睛裡閃出異樣的光，這目光中隱含着淡淡的不安，分不出是為難、厭惡還是恐懼。我突然回憶起雜司谷我叫喊「先生」時的情景，先生這兩次的表情如出一轍。

先生說：「我有個特殊情況，不便告訴你，不願意和其他人一起去那裡掃墓，連我的妻子我都沒有帶去過呢。」

私は不思議に思った。しかし私は先生を研究する気でその宅へ出入りをするのではなかった。私はただそのままにして打ち過ぎた。今考えるとその時の私の態度は、私の生活のうちでむしろ尊むべきものの一つであった。私は全くそのために先生と人間らしい温かい交際ができたのだと思う。もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向かって、研究的に働き掛けたなら、二人の間を繋ぐ同情の糸は、何の容赦もなくその時ふつりと切れてしまったろう。若い私は全く自分の態度を自覚していなかった。それだから尊いのかも知れないが、もし間違えて裏へ出たとしたら、どんな結果が二人の仲に落ちて来たろう。私は想像してもぞっとする。先生はそれでなくても、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れていたのである。

私は月に二度もしくは三度ずつ必ず先生の宅へ行くようになった。私の足が段々繁くなった時のある日、先生は突然私に向かって聞いた。

「あなたは何でそうたびたび私のようなものの宅へやってくるのですか」

「何でとって、そんな特別な意味はありません。——しかしお邪魔なんですか」

「邪魔だとはいいません」

なるほど迷惑という様子は、先生のどこにも見えなかった。私は先生の交際の範囲の極めて狭い事を知っていた。先生の元の同級生などで、その頃東京にいるものはほとんど二人か三人しかないという事も知っていた。先生と同郷の学生などには時たま座敷で同座する場合もあったが、彼らのいずれもは皆

我很納悶，但是並非為了研究先生這個人而出入他的家門。這件事也就不了了之了。現在回過頭看，我當時的態度莫如說是我的人生中彌足珍貴的一種品行。我認為正因為如此，我和先生才得以保持符合人性的溫情脈脈的交往。如果我的好奇心不加收斂，對着先生的內心世界刨根問底，也許維繫兩個人的同情心紐帶當時就會毫不留情地斷裂。少不更事的我對自己的態度渾然不覺，也許正因為如此才難能可貴。如果誤入禁區，冒犯了先生，我倆的關係不知道會釀成甚麼樣的惡果。現在想想都感到後怕。因為即便不這樣，先生也一直戰戰兢兢，唯恐別人冷眼觀察自己。

我往先生的府上跑得越來越勤快了，每個月我都要去叨擾兩三次。有一天，先生突然問我：

「你為甚麼總喜歡到我這樣的人家裡來呢？」

「要說為甚麼，也沒有甚麼特別的理由……打擾到您了嗎？」

「談不上打擾。」

先生的臉上的確絲毫沒有流露出困擾的表情。我知道先生的交際範圍其實極其狹窄，還知道他當時住在東京的老同學只有兩三個人。先生偶爾也和同鄉的學生在客廳裡聊天，但是看上去他們都不如我和先生那麼親近。



な 私 ほど先生に親しみをもっていないように見受けられた。

「私 は淋しい人間です」と先生がいった。「だからあなたの来て下さる事を喜んでいますが、だからなぜそうたびたび来るのかと聞いて聞いたのです」

「そりゃまたなぜです」

私 がこう聞き返した時、先生は何とも答えなかった。ただ私の顔を見て「あなたは幾歳ですか」といった。

この問答は私 にとってすこぶる不得要領のものであったが、私 はその時底まで押さずに帰ってしまった。しかもそれから四日と経たないうちにまた先生を訪問した。先生は座敷へ出るや否や笑い出した。

「また来ましたね」といった。

「ええ来ました」といって自分も笑った。

私 は外の人からこういわれたらきっと癩に触つたろうと思う。しかし先生にこういわれた時は、まるで反対であった。癩に触らないばかりでなくかえって愉快だった。

「私 は淋しい人間です」と先生はその晩またこの間の言葉を繰り返した。「私 は淋しい人間ですが、ことによるとあなたも淋しい人間じゃないですか。私 は淋しくつても年を取っているから、動かずにいられるが、若いあなたはそうは行かないのでしょうか。動けるだけ動きたいのでしょうか。動いて何かに打ちりたいのでしょうか……」

「私 はちっとも淋しくはありません」

「若いうちほど淋しいものはありません。そんならなぜあなたはそうたびたび私 の宅へ来るのですか」

ここでもこの間の言葉がまた先生の口から繰り返された。

「あなたは私 に会ってもおそらくまだ淋しい気がどこかでしているでしょう。私 にはあなたのためにその淋しさを根

「我是個孤獨的人，」先生說，「所以你來看我，我很高興。所以才問你為甚麼常上我家來。」

「這又是為甚麼呢？」

我這樣反問道。先生沒有作答，只是瞅着我的臉，問道：「你多大了？」

這樣的一問一答對我來說，實在令人摸不着頭腦，那時我沒有細問就回家了。不到四天工夫，我又去看望先生。先生一進客廳就笑着說：

「你又來了。」

「嗯，又來了。」我自己也笑了。

如果別人這麼說，我一定會惱火。可是這句話出自先生之口，情況卻截然不同。我非但沒有生氣，反而感到高興。

「我是一個孤獨的人，」先生那天晚上又重複了上次說的話，「我是一個孤獨的人，說不定你也是一個孤獨的人吧。我上了年紀了，耐得住寂寞，可以賦閒在家。你年紀輕輕的，總不能像我這樣吧。你總想多動動，找個地方宣洩一下吧。」

「我一點兒也不覺得孤獨。」

「年輕時最容易感到孤獨，否則你為甚麼老往我家跑呢？」

這時先生又提到上次那個問題。

「即使你上我家來，也不能完全消除你的寂寞。我沒有足夠的力量能根除你心中的寂寞。不久的將來，你就會找到新的方

もと ひ ぬ あ ちから  
元から引き抜いて上げるだけの力がないんだから。あなたは  
ほか ほう む いま て ひろ  
外の方を向いて今に手を広げなければなりません。今に  
わたくし うち ほう あし む  
私の宅の方へは足が向かなくなります」  
せんせい せんせい わら かた  
先生はこうって淋しい笑い方をした。

## 八

さいわ せんせい よげん じつげん す けいけん  
幸いにして先生の予言は実現されずに済んだ。経験のない  
とうじ わたくし は、このよげん うち ふく めいはく いぎ  
当時の私は、この予言の中に含まれている明白な意義さえ  
りようかい え わたくし いぜん せんせい あ い  
了解し得なかった。私は依然として先生に会いに行った。  
うち ま せんせい しょくたく めし く  
その内いつの間にか先生の食卓で飯を食うようになった。自  
ぜん けつ か おく くち き  
然の結果奥さんとも口を利かなければならないようになった。

ふつう にんげん わたくし おんな たい れいたん  
普通の人間として私は女に対して冷淡ではなかった。け  
れどもし わか わたくし いま けい か き きょうぐう  
れども年の若い私の今まで経過して来た境遇からいって、  
わたくし こうさい こうさい おんな むす こと  
私はほとんど交際らしい交際を女に結んだ事がなかった。  
それが原因かどうかは疑問だが、わたくし きょうみ おうらい であ  
私の興味は往來で出合う  
し おんな む おお はたら せんせい  
知りもしない女に向かって多く働くだけであった。先生の  
おく まえげんかん あ ととき うつく いんしょう う  
奥さんにはその前玄関で会った時、美しいという印象を受け  
た。それから会うたびに同じ印象を受けない事はなかった。  
しかしそれ以外に わたくし い がいい わたくし おく かた  
私 はこれとってとくに奥さんについて語  
るべき何物ももたないような気がした。

おく たくしよく たくしよく しめ きかい  
これは奥さんに特色がないというよりも、特色を示す機会  
こ  
が来なかったのだと解釈する方が正当かも知れない。しかし  
わたくし かいしやく し ほう せいとう し  
私はいつでも先生に付属した一部分のような心持で奥さん  
たい せんせい ふぞく いちがぶん このころち おく  
に対していた。奥さんも自分の夫の所へ来る書生だからとい  
う好意で、私を遇していたらしい。だから中間に立つ先生  
と のぞ ふたり  
を取り除ければ、つまり二人はばらばらになっていた。それで  
はじ し あ  
始めて知り合いになった時の奥さんについては、ただ美しい

向、不再往我家跑了。」

先生這麼說着，淒然一笑。

## 八

值得慶幸的是，先生的預言沒有靈驗。我涉世不深，甚至對這個預言中包含的明確含義也沒能聽懂。我一如既往地去看望先生，不知不覺中我成了先生家餐桌上的座上賓了。於是自然也不得不與夫人開口說話了。

作為一個正常人，我對女性並不冷淡。可從我的經歷來說，還沒有與女性有過真正意義上的交往。不知是不是這個緣故，我的興趣大多只是集中在大街上素不相識的女性身上。上次在大門口遇到先生的夫人時，留下了她非常漂亮的印象。以後的每次見面，無一不是同樣的印象。可是除此之外，我感覺夫人沒有甚麼特別值得一提之處。

這與其說是夫人沒有特色，不如說夫人沒有機會展示自己更加確切。不過我總是把夫人當作先生的附屬品來對待，夫人也似乎把我當作來訪的一介書生而熱情相待。因此去掉先生這個中間媒介，我和夫人就像是毫不相干的兩個人了。所以對剛剛認識的夫人，除了覺得漂亮，再也沒有其他甚麼感覺了。